

第六十三回神田古本まつりの收穫（二）

土屋 博

十一「詳解 古今名歌新選」窪田空穂編

（博文館、明治四十五年刊、定価金壹圓、七六六頁）

古書價格三百圓也。主立ちたる歌を春夏秋冬（さらに時令、人事、天象、地儀、動物、植物に分けて）、無季、戀、人事（述懐、賀、哀傷、別離、など）ごとに列挙し、註釋を附すものなり。窪田空穂（うつぼ）（一八七七年生れ、一九六七年歿、東京専門學校文學科卒。早稲田大學教授。）は歌人、國文學者。たとへば、新年の歌は三首をとり、①紀貫之「新しく明るる今年を百年の春のはじめと鶯の啼く」、②藤原俊成「天の戸を明るるけしきも靜かにて雲居よりこそ春は立ちけれ」、③落合直文「一つもて君をいはん一つもて親をいはん二本ある松」。

十二「山鹿素行子法會・乃木將軍追悼會 記事」

（素行會、大正元年十一月刊、八六頁）

古書價格八百圓也。九月二十六日素行會例祭の記録なり。山鹿素行（會津出身、一六二二年生れ、一六八五年歿）は兵法學者。林羅山に朱子學を學び、赤穂藩淺野家に仕へるも、その後朱子學に疑問を持ち、独自の學問體系を構築す。「中朝事實」名高し。金子堅太郎子爵、「乃木將軍に對する觀念」に曰く、十三年來の乃木舊友の自殺を解釋せば、どうせ人間一度は死ぬ、楠正成の死は勤王の士をして幾百年の後まで奮起させた、我も少し曇りかけて居る處の忠君愛國の精神を發揮せんとの決心か、と。

十三「山鹿素行先生と乃木將軍」文學博士井上哲次郎先生講話

（帝國軍人後援會、大正二年刊、定価金五錢、三二頁）

古書價格五百圓也。井上博士曰く、乃木將軍亡くなる三日前の九月十日、皇太子殿下に自分で版をしたる「中朝事實」を献上せり、と。また、乃木本人に確認したる處、吉田松陰に直接は學ばず、伯父の玉木文之進に習ひたる由。松陰自筆の士規七則を肌身離さず所持したるも十年戰爭の折り紛失したる由。

十四「山陽詩抄新釋」文學士中村德助先生選註

（田中宋榮堂、大正貳年刊、定価金五拾錢、三四九頁）

古書價格參百圓也。二度目の購入なり。序に曰く、「山陽の詩は巧まずして巧に、宇々苦心の痕なくして、而して筆端婉轉たり、其の想は縦横自在、天地の大を歌ひ微塵の妙に入る、之れを放てば六合にあまねく之れを收むれば掌中に在り、宇宙の奥を搜り微細の極に隠る、人物、風景、山川、草木一々採りて好箇一情の詩畫を醸成す」と。

十五「佛教人生觀」文學博士南條文雄著

(中央出版社、大正八年刊、定價金壹圓參拾錢、四五四頁)

古書價格五百圓也。南條文雄(ぶんい)は、一八四九年生れ、一九二七年歿)は、東本願寺高倉學寮にて學び、オックスフォード大學に派遣せらる。日本第一の文學博士號。大谷眞宗大學教授。凡そ忠臣は必ず孝子の門に出づ。三年親のところに帰省せぬ頼山陽の書いた外史五冊目(楠氏の卷)を窺めたる法海の話など。

十六「名文の祕訣及文例」慶應大學教授文學士内藤智秀・鷲尾義直共編

(二誠社藏版、大正九年四版、定價金貳圓拾錢、八二二頁)

古書價格千圓也。目次は、總論、作法、苦心談、書簡文、敘事文、敘情文、和歌及俳句、議論文、儀式文、演説及講演、附錄文章餘談。澁澤榮一曰く、「手紙を書くは人と對面する如きなり。徳富蘇峰は手紙の要素は三つ、簡潔と明快と精確と云はるるが、私は婉曲といふことも注意すべき」と。

十七「玉かつま 上下」本居宣長著

(日本古典全集刊行會、大正十五年刊、非賣品、卷上二六四頁十卷下二八五頁)

古書價格五百圓也。天金、函入。本居宣長六十四歳より七十二歳までの隨筆を纏めたるものなり。

十八「頼山陽」徳富猪一郎著

(民友社、大正十五年刊、定價金四圓八拾錢、本文四一五頁十附録一三四頁)

古書價格五百圓也。天金、函入。状態良く、二度目の購入。蘇峰、緒言に曰く、予は此の一篇にて、予の頼山陽に關する觀察の輪郭だけは描き得たと信ず、と。

十九「抄本平家物語」東京開成館編輯

(東京開成館藏版、昭和三年訂正再版、定價金七拾二錢、一八四頁)

古書價格五百圓也。師範學校、中學校、高等女學校用文部省檢定濟教科書なり。祇園精舎の事より大原御幸の事まで二十六段を収録す。

二十一「大日本思想全集 賴山陽集 附山縣大貳・武内式部」

(先進社、昭和六年刊、五三三頁)

古書價格二千五百圓也。天金。二度目の購入、前回は購入價四百圓。賴山陽の仕事の概略を大摺みにて把握するに際して極めて便利なる書。日本外史論贊、新策抄、山陽文集、山陽書翰集、日本政記の口語譯及び日本樂府の讀み下し文を収録す。

(令和五年十二月二十六日受附)